

此郡は、御笠郡那珂郡と糟屋郡との間にはさまり、國中にて最小なる郡なり、只八村あり、八村皆東の山の麓に在て、南北に連れり。○中 篤信ひそかに謂、筵田郡は、甚小にして、那珂、糟屋御笠につづけり、地勢を見れば、分つべき所にあらず、されども右三郡何れとも大なり、若其上に又席田郡に有所の戸數を加へば、千戸に過なん事をおそれて、戸數少なけれども、別に此郡を分ちたるならん、其故に此郡は甚小なるべし。

〔大内家壁書〕從山口於御分國中行程日數事○中 略

筑前國○中 席田郡五日、請文十五日、○中 略

寛正二年六月廿九日

備中守奉秀明○下 略

糟屋郡

〔筑前國續風土記十七〕糟屋郡

此郡東には高山有て、穂波鞍手の兩郡に隣り、南は御笠に接し、西南に席田郡有、西北に海をおふ、且裏粕屋は東は宗像郡に交れり、表裏を合すれば、南北は長く、東西は短し、土地肥饒して良田多し、山多く、海廣く、川流れて魚鹽薪材とも玄からず、郡中に宿驛有て、諸方の旅人に對接し、且城邑に近くして便利多し、長政公入國の後、大郡なればとて表裏にわかつて、伊野香椎の山の南表糟屋とし、北を裏糟屋と稱す。

〔日本書紀十七繼體〕二十二年十二月、筑紫君葛子恐坐父誅、獻糟屋屯倉求贖死罪、

〔大内家壁書〕從山口於御分國中行程日數事○中 略

筑前國○中 略 糟屋郡五百、請文十五日、○中 略

寛正二年六月廿九日

備中守奉秀明○下 略

宗像郡

日本紀第一卷には胸肩と書り、舊事記には宗像とし、古事記には宗形とす、凡和語のならひ、訓同